様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０６８

研究課題名（和文）古代日本語における『古事記』の万葉仮名とその表記意識についての研究

研究課題名（英文）Differentiation principles in the manyogana writing system in the Old Japanese

研究代表者
澤崎　文（SAWAZAKI, Fumi）

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：４０７０６６４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、『古事記』の漢字万葉仮名交じり表記において、同じ音節に二種類以上の万葉仮名が使われている場合、それらに見られる使用傾向の違いの有無を調査した。
　特にその万葉仮名の前にどのような文字が置かれているかという表記環境に注目し、調査した結果、一部ではあるが『古事記』の万葉仮名においても、『万葉集』などに見られたものと同じように、前に置かれた文字が仮名であるか訓字であるかによって、異なる字母を使用する傾向があることが明らかになった。これによって同じ音節をあらわすにも、字母によって仮名連鎖の中に使用されやすい字母と訓字と交用されやすい字母という、異なる性格があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The current study investigates the usage of manyogana - the Chinese characters appropriated to write Japanese phonographically in the Old Japanese - observed in Kojiki. Specifically, the study examines whether any principles can be identified in the way manyogana were selected when more than two different characters can represent the same Japanese syllable. Particular attention is given to the context in which a manyogana character appears. The results reveal, for at least some of the Japanese syllables, preference for a subset of characters depending on whether the preceding character is a manyogana character or a kunji - the Chinese characters used logographically (and to be read in kun-readings): the preference also recognized for Manyoshu. This finding indicates that there are types of manyogana characters that were more likely to be used in the sequences of manyogana characters, while others were more likely to be mixed with kunji characters.

研究分野：日本語学

キーワード：万葉仮名　古事記　漢字仮名交じり　音仮名　訓仮名　表記

１．研究開始当初の背景

上代の漢字万葉仮名交じり表記においては、漢字の正用法である正訓字と漢字の仮用法である万葉仮名が交用され、その場合一見して文字の種類は漢字ばかりが並んでいても、内実は用法の違う文字が混在する状態となっている。『古事記』の散文部分においても正訓字と万葉仮名が交用されており、この場合、読み手はそこにある文字が訓字であるか仮名であるかを何らかの形で判断していたであろうと思われる。このような訓字か仮名かの判断に資するものとして、『古事記』にはひとつの音節に対する万葉仮名字母の数がかなり絞られていることや、訓字として使用する文字を仮名字母として使わない傾向の存することが、先行研究によって既に報告されている。

申請者は以前、上代の漢字万葉仮名交じり表記においては、すでに指摘されてきたような正訓字と万葉仮名字母の抵触を避ける工夫だけではなく、万葉仮名をどのような箇所に用いるかによって、正訓字と間違えにくいような字母を選ぶという意識がなされていることを『万葉集』や『続日本紀』宣命の表記を調査した上で指摘した。つまり、文字の並びの中で、正訓字の直後に書かれる万葉仮名字母には、正訓字と間違われにくいような、仮名としての純粋に表音的な特徴を強く持つ字母を積極的に選び、音仮名の直後に書かれる万葉仮名字母には、そのような字母選択の制約が見られないということである。これを、仮名がどのような用法の文字と接して用いられるかという、仮名の「表記環境」による字母選択であると考え、字母選択の要因にこの「表記環境」という新たな観点を取り入れることを提案した。

２．研究の目的

本研究は、この「表記環境」が仮名字母の選択にどのような影響を与えているかについて、上代の散文資料である『古事記』を対象に調査するものである。すでに調査した『万葉集』や、『続日本紀』宣命のみならず、『古事記』においても同様の表記意識が見られれば、「表記環境」による字母選択の意識は上代の漢字万葉仮名交じり表記一般に広く見られると言うことができる。また、正訓字の直後に使用されやすい音仮名字母とそうでない音仮名字母があるということは、ひとつの表記の中に見える音仮名であっても、正訓字との親疎によって少なくとも 2 種に分類されるということになる。『古事記』における仮名字母の使用傾向には、『万葉集』などその他の漢字万葉仮名交じり資料と比較してどのように異なるか、もしくは一致しているかを見ることで、ただ万葉仮名と一括りにされていた日本上代の音節文字の性格を分類することができると考える。

３．研究の方法

上代の漢字万葉仮名交じり表記資料である『古事記』の仮名表記を扱い、特に仮名が書かれる位置がどのような環境であるか、つまり、当該の仮名の前後が音仮名であるか、訓仮名であるか、もしくは訓字であるかといった面に重点を置いて調査した。その考察の際には、上代における他資料の用字傾向との比較もおこなった。

（１）データベースの作成

まずは『古事記』の仮名データベースを作成するにあたって、真福寺本『古事記』を底本とする『古事記　修訂版』（おうふう）をもとに用例の抽出をおこなった。また、用例採集においては、『国宝真福寺本古事記』（1978　桜楓社）による底本の影印も適宜参照した。データの整理に際しては、以下の 1～7 項目の情報を加え、検索可能な形にしてデータベースを作成した。

1. その仮名があらわす音節と字母。
2. その仮名の用法。（音仮名か、訓仮名か、二合仮名か）
3. その仮名が表記する語。（品詞、語形、固有名詞〈人名・地名〉かそれ以外か）
4. その仮名の前後の表記環境。（訓用法の字か、音仮名か、二合仮名か）
5. 散文本文、歌謡、訓注のいずれに用いられるか。
6. 散文本文に用いられる場合、以音注の有無。
7. 底本中の使用箇所。

これにより、散文本文 4244 例、歌謡 5824 例、訓注 360 例、合計 10428 例の仮名情報が採集された。

（２）考察

作成したデータベースを元に、『古事記』の仮名の用字傾向について、特に表記環境に重点を置いて考察した。具体的には、各音節をあらわす万葉仮名の各字母が、前後をどのような用法の文字に挟まれているかについて、音節ごと、字母ごとに比較をおこなった。用法の分類は、訓用法を「正訓字」と「訓仮名」、音用法を「二合仮名」とその他の 1 字で 1 音節をあらわす「音仮名」とした。また、『万葉集』、『続日本紀』宣命に加え、平安時代の漢字万葉仮名交じり資料である『新撰万葉集』を対象とし、これら各文献に見られる万葉仮名の用字傾向と『古事記』との比較もおこなった。

４．研究成果

調査・考察の結果、『古事記』では、『万葉集』ほどにはその仮名の表記環境によって使用する字母が左右されないことが分かった。そもそも先行研究でも指摘されていたとおり、『古事記』の万葉仮名はひとつの音節に対する字母の種類が『万葉集』などに比べ少

なく、主要字母も絞られている。1 音節に対し用例の多い複数の字母が用意されておらず、仮名字母を比較して使い分けの傾向を見ることが比較的困難なのである。また、『万葉集』の訓字主体表記が主に自立語の語幹部分を正訓字で、活用語尾や付属語部分を万葉仮名で書くという形をとり、訓字と仮名とが語や文節の中でも交用されているのに対し、『古事記』の散文中の万葉仮名は、固有名詞や動詞など自立語全体を 1 字 1 音節の万葉仮名であらわすという違いがある。つまり、『古事記』の散文本文中に見られる万葉仮名は、いわゆる変体漢文体に埋め込まれる形でまとまった仮名連鎖として使用されているため、訓字と仮名との交用が少なくとも語以上の単位でなされる事が多い。このことから、『万葉集』では訓用法の文字の直後に使用される音仮名の例が音仮名全体の 3 分の 2 ほどあったのに対し、『古事記』では音仮名全体の 4 分の 1 程度とごく少なく、そもそも音訓があまり交用されていないと言うことができる。これら『古事記』に特徴的な表記方法が影響し、表記環境による使用字母の違いが『万葉集』ほどにはあらわれなかったのだと考えられる。

その一方で、『古事記』の仮名字母を「音仮名」「訓仮名」「二合仮名」と分類してそれぞれの直前にどのような用法の文字が置かれるかという表記環境を調査したところ、【表 1】のように異なる傾向が見いだせた。

【表1】『古事記』散文本文中に見える
仮名の種類とその表記環境

直前＼仮名	訓仮名	二合仮名	音仮名	計
訓用法	14	78	1303	1395
音仮名	1	6	2733	2740
二合仮名	0	2	61	63
その他	2	0	44	46
計	17	86	4141	4244

調査の結果から、『古事記』の散文本文に使用される訓仮名は、全 17 例中 14 例までが直前に訓用法の文字（正訓字＋訓仮名）がある環境に使用され、同じく二合仮名は全 86 例中 78 例、音仮名は全 4141 例中 1303 例が直前を訓用法としていた。音仮名は直前の文字が音仮名である環境に 2733 例使用され、その全用例に占める割合が著しいが、訓仮名と二合仮名は直前の文字が訓字である傾向が強い。このことは、『万葉集』や『新撰万葉集』の漢字万葉仮名交じり表記にも共通して見られる傾向である。これにより、『古事記』においても、表記環境によって仮名字母の使用傾向が異なる面が見いだせた。

また、一部ではあるが個別の音節においても、表記環境によって異なる字母を使用するものが見られた。比較的仮名の字母種が多い音節シに焦点を当てると、【表 2】のように「斯」字と「志」字が異なる傾向を見せる。

【表2】散文中仮名「シ」の直前の
表記環境別用例表

直前＼仮名	斯	志	計
訓用法	1	24	25
音仮名	37	61	98
二合仮名	0	0	0
その他	3	1	4
計	41	86	127

すなわち、「斯」は全 41 例中直前が訓用法である環境に 1 例、直前が音仮名である環境に 37 例とほぼ音仮名の後に偏って使用され、直前が訓字である環境にはほとんど使用されない。対する「志」は全 86 例中直前が音仮名の環境に 61 例と多いが、同時に直前が訓字である環境にも 24 例と多数使用されている。「斯」は音仮名連鎖の中に使用され、「志」は訓字と交用して使用されるという傾向が指摘でき、この傾向は『万葉集』における両字母の様子や、『古事記』歌謡に「斯」が多く散文に「志」が多いことと符合する。用例を詳細に見ると、この 2 字の異なる傾向はそれぞれが表記する語の性格によるものでも、表記する語の部分（語頭か語中尾か）によるものでもなく、訓用法との交用に影響されるものと考えられる。

このように、一部ではあるが『古事記』の仮名にもその表記環境によって性格の異なる字母が使用されることが明らかになった。訓仮名は仮名の中でも限りなく正訓字との境界が曖昧であり、正訓字との連続性が指摘される。この訓仮名を、訓用法との交用を本来のものとする極におくと、その他の音仮名字母を、訓用法との親和性が高い順に並べることができる。具体的に述べれば、「志」は「斯」よりも訓用法との親和性が高く訓仮名により近い性格を持つと考えられる。「斯」は音仮名として訓用法の文字から独立的であり、訓仮名とは対極に位置すると言える。「斯」「志」のような主要字母として頻用されるものも、この並びの中におくことができるという点が重要であり、ある音節を等しくあらわすように見える音仮名でも、そこには性格の違いが認められるのである。さらには、この図式が『古事記』のみならず、資料を越えて万葉仮名字母の性格として言えるということは、ある資料の書き手による「書き癖」ではなく、広く行なわれていた表記意識であるということになろう。

以上のとおり、『古事記』の用字傾向を調査し、上代～平安におけるその他の資料とそれとを比較することによって、漢字万葉仮名交じり表記における仮名の性格と表記意識

とに新たな知見を加えた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
澤崎文、『古事記』の仮名字母に見える性格の違い、日本語学研究と資料、査読無、第 38 号、2015、pp.(1)-(14)

６．研究組織
(1)研究代表者
澤崎　文（SAWAZAKI　FUMI）
早稲田大学文学学術院　助手
研究者番号：40706644